
MONSTER HUNTER PORTABLE 2 n d G 狩猟笛の音色

夕顔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MONSTER HUNTER PORTABLE 2ndG
狩猟笛の音色

【Nコード】

N30040

【作者名】

夕顔

【あらすじ】

弱肉強食。それが世界の掟。世界にはハンターと呼ばれる狩人が、その掟に逆らうべく、襲い来るモンスター達と死闘を繰り広げている。

これは、あるハンターの狩猟の記録である。対するは黒角竜。死闘の幕が開ける。

世界にまだ未知が溢れ、凶暴なモンスターが闊歩していた時代。人々は身を寄せ合い、村を作り、街を作った。

襲い来るモンスターたちに成す術もなく壊される街。

しかし、人々はめげず、何度でも、何度でも街を作り上げた。

そして、何時しか、襲い来るモンスターたちから人々を守る者たちが現れた。

彼らは“ハンター”と呼ばれ、自身よりも遥かに巨大なモンスターたちに挑んでいく。

“ハンター”達は倒したモンスターの素材で、己の武器を作り、防具を作った。

人々は巨大なモンスターに打ち勝つ彼らを英雄と呼んだ。

そして、時代は下り、世界が既知により満たされようとした頃。モンスターの脅威が去り、平和になったと思われた頃。

悲劇は起きた。

世界一発展したシュレイドの城下町。

その中心である、シュレイド城。

そこに厄災が舞い降りた。

其の名は■■■■■。

黒鱗に身を包んだ、厄災の代名詞。

土を焼き、鉄を溶かし、水を煮立たせ、風を起こし、木を薙ぎ、炎を生み出す者。

一夜にして、シュレイドの町は廃墟と化した。

それは立て続けに他の街を襲い、そして、世界中の街を破壊して回った。

それは、過剰に殺されたモンスター達の怒り。

世界は再び、未知に溢れた。

『とある辺境の集落の伝承より』

サクツ。サクツ。サクツ。サクツ。

気を抜けば、足を取られそうになる砂の大地を、獲物を探して歩き回る。

「流石に夜は冷えるな……」

見上げれば、防具によって狭められた視界から、満点の星空が顔を覗かせる。

雲1つない晴天の夜空が、明日もここには雨が降らないことを示している。

一体、この地には何年間雨が降っていないのだろうか。

つい、そんなことを考えてしまう。

俺の背中には、紫と朱の巨大なカスタネットに長い柄を付けたようなもの。

狩猟笛と呼ばれるその武器は、俺の相棒だ。銘をウチナラシという。

今、着こんでいるこの防具——ギザミZシリーズと共に、俺の命を預けるのに信用に足る武具だ。

今回の依頼は、黒角竜と呼ばれる、ディアブロス亜種の討伐。

砂漠に生息し、砂漠の王と呼ばれるでも差し支えないような強さを誇る。

飛竜種と呼ばれる、ワイバーンの様に前足が翼に変化し、後ろ脚と尻尾でバランスを取るモンスターに分類される。

今回の依頼は、G級ではなく、上位に位置づけされる依頼だが、決して気を抜くことは許されない。

いかにG級の防具を装備しているとはいえ、直撃を喰らえば、即死することもある。

まして、ソロで活動している俺にとっては、動けなくなるだけで死に直結する。俺はこの砂漠に隣接する村のハンターだ。そして、その村には俺以外にハンターはいない。俺が死ねば誰が村を守るのか。責任は重大だ。

また、現在、大型モンスターが居ないからと言って、気を抜くのもダメだ。

何時、何処で、何が起きても大丈夫のように、狩り場に着いたら集中していなければならない。

依頼書に書かれている標的だけが、この狩り場にいるとは限らないのだ。

予期せぬ乱入で死亡したベテランハンターは数知れない。

緩みかけていた気を引き締め直して、俺は再び歩き始めた。

G級と呼ばれる、ごくごく限られたハンターのみ受注を許されるクエストがある。

ハンターが受ける依頼はレベル分けされており、低レベルから順に、下位、上位、G級の三つに分かれる。

そのうち、G級はあまりにも危険度が高すぎて、最上級の实力がなければ受注を許されない。

同種のモンスターでもG級ともなれば、上位や、ましては下位などよりもその強さは桁違いになる。

だからこそ、それらのモンスターから取れる素材で作られた武器

は強力無比。

ハンターにとって、強力な武具は憧れである。

G級ハンターは、防具に対する羨望の眼差しと、自身の実力に対する尊敬のまなざし、そして、英雄の称号を得られるのだ。

故にG級ハンターは、多くのハンターたちの目標^{ゆめ}になる。

しかし、その者達の殆どが目標^{ゆめ}半ばで倒れていく。

モンスターと日々戦うこの職種^{ハンター}は死亡率が断トツに高い。1年間に、およそハンターの4割が死んでいくとさえ言われているのだ。

だが、それでもハンターを目指す者達は後を絶たない。

ハンターの庇護の下に居る者たちにとって、どんなハンターでも、英雄に変わりはないのだ。

そして、新人ハンターにさえ、自然は——モンスターは容赦をしない。

4割という数字の大半は、新人ハンターであると言われている。

彼らの内、中堅のハンターや、上級のハンターとなるのは、3割程度。さらに、G級ハンターともなれば、10人にも満たない数字であろう。

だが、数年前、そんなシビアな世界で、1人の少年が史上最年少ではなかったものの、歴代2位の年齢でG級ハンター入りを果たした。

これだけでも十分すばらしいのだが、後2つ、特筆すべき点があった。

第一に、ソロ活動のみでG級ハンター入りしたこと。

通常、ハンターたちは狩猟における危険度を下げるため、2〜4人でパーティーを組む。

パーティーを組むメリットはそれだけではない。

単純に人数が増えることで、モンスターへのダメージが増加し、狩猟を早く終わらせることができる。さらに、仲間同士の連携により、ピンチの時も助けが入ることができる。

下位のハンター達も、パーティーを組むのが基本で、ハンターズ

ギルド側も、パーティーを組むことを推奨している。

それがG級や上位ともなれば尚更のこと。

ソロでG級ハンターの仲間入りを果たした例は、過去に片手で足りるほどしかない。

そして、第二に、狩猟笛と言うかなり扱いづらい武器のみしか使っていないかった点だ。

狩猟笛とは、読んで字のごとく、狩猟に使えるようにした笛のことである。笛と言っても、形状や、音の出し方は様々で、共通して言えるのは、演奏することにより仲間や自身を強化できるということ。

狩猟笛が出せる音は、全7種の音から、3種の音がそれぞれの武器により異なっており、備わっている。

それらの音は、“色”が付いており、白、紫、黄、赤、青、緑、水色で、組み合わせることにより、効果を発揮する。

狩猟笛は、仲間がいる場合は、大きな活躍ができるものの、ソロで狩りをおこなう場合、演奏にかかる時間を考慮しなければいけないため、他の武器に比べて効率が悪いといえる。

また、しばらくすれば演奏の効果も切れてしまうため、何度も演奏しなければならぬ。

じゃあ、演奏をしなければいいじゃないかと思うだろうが、狩猟笛の重量はあまり大きくない。内部が空洞だったりするため、案外軽い事が多いのだ。しかし、軽いからと言って振り回せるかと言うとそうでもない。狩猟笛は総じて長い柄を持っており、それが邪魔をして緩慢な動作でしか振り回せないのだ。

となると、必然的に演奏による強化をしなければ、モンスターに太刀打ちできないということになる。

仲間が居る時は活躍できるものの、あくまで、補助としてであり、前線に出て、戦うことはあまりない。

つまり、仲間が居なければ、非常に扱いづらいのだ。

だからこそ、狩猟笛を使うハンターの数はとても少ない。

この2点を加味すると、その少年は天才的な狩猟笛使いだということが分かるだろう。

そして、その少年はあるハンターを彷彿とさせるものだった。今から、20年近く前、伝説的な狩猟笛使いがいた。

名前はシドウ・ミナカタ。

東方の出身だが、よく分かっていない。

10年ほど前までは、偶に目撃情報があったが、その後はさっぱりで、噂では死んだか、何処かの辺境の村でハンター稼業を続けているといわれている。

シドウは、この少年と同じように、ソロで狩猟笛使いだった。

そして、この少年の名はサザメ・ミナカタ。

姓が一致したのは偶然ではない。

実際に、彼はシドウの息子だと語っていたのだ。

当然、あつという間にその話はハンターの間にも広まった。

何せ、ハンターだったら誰でも一度はその名を聞いたことのあるような伝説的なハンターの息子が、父と同じように頭角を現したのだ。

注目をされない方が無理がある。

また、彼は父について、辺境の砂漠地帯にある村でハンターをしていると言ったという。

彼——サザメは父と同じく、街に留まってハンター稼業をするのではなく、各地を転々とするのを好み、街に帰って来るのは2、3年に一回ほどだそうだった。

彼は何時も、ギザミ系統のシリーズを愛用しており、その顔を見たものは少ないという。

広大な砂の大地を渡り切ると、エリア1に出る。

ここはオアシスのようになっていて、わきに少量ながらヤシの木と、小さな湖がある。

狩り場は大抵エリアと呼ばれる部分に分けられていて、先ほど俺が渡って来たところがエリア2だ。

モンスターにも、当然縄張りというものがあり、各エリアはその境界線に沿って別れるような形になっている。

今回俺の標的であるディアブロス亜種は、この“メナルー砂漠”の殆どの範囲に出没するため、見つけるのは容易ではない。

俺は切れかったホットドリンクの効果に戻すために、足を止めて、今日2本目となる瓶を開けた。

中に含まれているトウガラシの辛さが、舌をピリリと刺す。

砂漠は、昼は灼熱地獄で、クーラードリンクと呼ばれる、体温の

上昇を抑える飲料を飲まなければ、暑さでじわじわと体力が削られ、最悪死に至る場合さえある。

逆に、夜になると、雪山ほどではないにしろ、マイナス10度を下回る極寒地獄に早変わりする。

今度はホットドリンクと呼ばれる、体温を上昇させる飲料を飲まない、寒さでスタミナが削られて、動けなくなってしまう。

どちらにせよ、過酷な環境であるのは間違いない。

瓶に入ったホットドリンクを飲み干すと、再び歩き始めた。

目指すはエリア5。

このエリアを抜けたところにある。

先ほどのエリア2と同じように、砂漠が広がっている。

最も出現率が高いエリアの一つだ。

恐らく、出会えるだろう。

俺は、若干小走りになりながら、エリア1を抜け、エリア2に入る。

3、40メートルほど先だろうか、その辺りに大きな黒い何かが見えた。

「ビンゴだな……。さて、狩猟開始といきますか」

俺は、ウチナラシを背中から取って、長い柄の部分を右肩に乗せるようにして構える。

これが最も基本的な構え。

「はっ！」

短く呼吸を吐き出すと、柄を持って、左から右に振りおろす。と同時に柄の先端にあるスイッチを入れた。

地面を本体の部分が叩く。この一連の動作を、狩猟笛使いは“1の構え”と呼ぶ。

「かちり」と音がすると、本体の二枚貝のようになっている、紫と朱色の部分がリズムミカルに動き出し、軽快な音が流れ出る。

同じような音のリズムを二回繰り返すと、身体が軽くなった。

今のリズムは『解放の旋律』と呼ばれるもので、全二段階があり、

一段階目の今は移動速度が大幅にアップする。

そこから、狩猟笛をブンツと後ろに振り上げ、後ろの地面に叩きつける。そして、両手で上に掲げるように持ち上げた。この動作は“3の構え”である。

またしても砂が舞い、「かちり」と音がして、全く違う旋律が辺りに響き渡る。

ディアブロス亜種はまだこちらに気づいた様子ではない。

これだけ距離を取っているのに、気付かれることはないだろう。

同じように二回旋律を繰り返すと、今度は全身に力が湧いてきた。今度のリズムは『猛攻の旋律』と呼ばれるもので、“猛攻”の名が示す通り、力を増大させる。

続いて、掲げた状態から、前へと叩きつけ、柄の部分を蹴り上げて両手でしっかりと支えた。

「かちり」、「かちり」と二回連続で何かが切り替わり、先ほどまでの2つとは少し違う音が流れだす。

これを“2の構え”と呼び、これまでの1、3を合わせて演奏していくことになる。

一度だけ、リズムを鳴らすと、再び後ろへ叩きつけ、“3の構え”に切り替える。

これも同じく一度鳴らすと、今度は『堅守の旋律』が発動した。

これは、読んで字のごとく、防御力を上昇させるものだ。

そして、“1の構え”に戻し、同じことをもう一度して、効果を上乘せする。

ただし、今度の『解放の旋律』は、攻撃を弾かれても、無理やり押し通せるようになるという効果が付く。

丁度タイミングよく、ディアブロス亜種がこちらに気づいたようだ。

「さて、行くか」

俺はウチナラシを仕舞うと、ディアブロス亜種に向かって走る。

まだ、相手は動く気配はない。

警戒しているのか、周囲をしきりに見回している。

その巨体は、まさしく“黒”だ。

頭に特徴的な2本の角が生えているディアブロス種。

その亜種は、通常種が黄土色の様な体色をしているのと違い、全身が黒い。

通常種ですら、気性が荒いとされているのに、亜種ともなるとその気性の荒さに磨きが掛かっている。

元々、亜種と言うのは、通常種に比べ能力が高く、手強い相手とされていて、幾分か狩猟のレベルは上がる。

その中でも、ガノトトス亜種、ディアブロス亜種、グラビモス亜種の三種は、別格の強さを誇っており、ハンターの間ではあまり相手をしたくない相手として知られているのだ。

全速力で間を詰めると、此方を窺うその双眸に、その双角にウチナラシを叩きつけた。

「グラアアア!？」

ドゴン! という音がして、その頭蓋に叩きつけられた狩猟笛。薄皮が僅かに裂け、少量の血が飛び出す。

若干ひるんだように、ディアブロス亜種が此方を睨みつけた。ダメージによるひるみではない。突然、攻撃されたことに驚いたのだろう。

その証拠に、俺に対して威嚇行為——足踏みし、尻尾を地面に打ち付ける——をしている。

俺はその隙に奴の足元に潜り込んで、ウチナラシを振り回した。右、左、右、左。

血こそ出ていないが、衝撃は内部に浸透して行っているはずである。

しかし、テンポよく打ち据えていくが、効果があるようには見受けられない。

モンスターは強靱だ。体力、回復力、膂力、全てが信じられないほど高い。それに対して、ハンターの一撃一撃は重くない。モンス

ターの強靱な甲殻や鱗などには全く効果がないように見えるだろう。だが、一見効果がないように見える攻撃でも、ダメージは蓄積している。それを積み重ねていけば必ず倒すことができるのだ。

「グロオウウー!!」

イラついたように、ディアブロス亜種が唸る。

そのまま、巨体を若干後ろに引くと、勢いよく走りだした。

俺の真上を、凄まじい重量を持った肉体が通り過ぎていく。

こんなのに正面から当たれば、いかに強固な防具を装備していたとしても、一瞬にしてただの肉塊^{ミンチ}になってしまっただろう。

だが、その重量は時として仇となる。

徐々にスピードが付いた突進は、その重量のせいで容易には止まらない。

結果、奴は腹を地面に擦り付けるようにして漸く停止した。

俺のいるところから、目測で50メートル以上は離れているだろうか。結構な距離だが、ディアブロス亜種にとってはそれほど関係がない。同じように突進して距離を詰めればいいだけの話なのだから。

しかし、俺にとっては非常にまずい。

こいつの突進は、その巨軀を支える強力な後ろ脚により、若干の方向修正が行われるのだ。

つまり、僅かながら追尾性があるということ。当然、距離が離れていればいるほど修正が効きやすくなり、ハンターとしては避けにくくなる。

俺は、急いでウチナラシを仕舞うと、右に向かって全速力で走り出した。

と、同時にディアブロス亜種も追撃態勢に入る。

最初はゆっくり、だが、徐々にスピードに乗って来る。

「うおおお!!」

ギリギリまで引き付けると、最後に、全身のばねを使って前方の空中へ身を投げ出す。

胸から飛び込んだため、衝撃で肺の中の空気が押し出される。

間一髪、俺のすぐ後ろを黒い塊が通り過ぎた。

俺はすぐ体勢を立て直すと、ディアブロス亜種に向かって走り出した。幸い、距離はそれほど離れてはいない。

丁度振り向いた頭を、ウチナラシで殴り付ける。

そのまま前転で股下に潜り込み、その左足にウチナラシを叩きつけた。

だが、ディアブロス亜種は意にも介さず、今度は、頭から生えている二本の角で、砂地の地面を押しつけ、完全に潜ってしまった。奴が通った後の地面を砂が覆い隠し、何処に行ったのか分からなくなる。

地中からの強襲。

それはディアブロス亜種の最も恐ろしい技だ。

出てくる直前まで、何処にいるのか分からず、慣れないハンターはこれにやられてしまうことが多い。

しかし、この技は非常に恐ろしいように見えるが、相手が特別な状態でない限りは、あるアイテムを使えば最大のチャンスになる。

俺は、ポーチから、袋に包まれた玉の様なものを取り出すと、ディアブロス亜種が潜った辺りに投げつけた。と、同時に俺は手で耳を塞いだ。

辺りに、ギイイイーン！！　と言う爆音が響き渡る。

「グララアアア！？」

次の瞬間、ディアブロス亜種が地面から半身を跳び出させた。苦しげに、何度も暴れて唸り声を出している。

今投げたのは、音爆弾と呼ばれるアイテム。モンスターに備わる“鳴き袋”と呼ばれる発声器官を、火薬で爆発させることで辺りに強烈な音を撒き散らすというものだ。

音に敏感なモンスターや、地中を潜るモンスターに効果があり、モンスターの種類によっては、かなりの時間無防備にできる。

俺は、暴れて苦しそうに首を振っているディアブロス亜種に、ウ

チナラシを連続で叩きつける。

ようやく抜け出せたのか、ディアブロス亜種は一気に空中に舞い上がると、徐々に高度を下げてきた。

即座にウチナラシを仕舞うと、俺はディアブロス亜種の視線の先に、音爆弾に似た玉を投げつける。

目を瞑ると、強烈な光が夜の砂漠を照らし出した。

滞空中にその光を浴びたディアブロス亜種はバランスを崩し、地上に落下する。

超重量の巨体が地面に激突し、地響きのような音を立てる。そして、砂漠の砂がもうもうと舞った。

今、俺が投げたのは“閃光玉”と呼ばれるアイテムだ。

絶命時に強烈な光を放つ“光虫”と呼ばれる虫を、“素材玉”と呼ばれるアイテムに埋め込み、それを投げつけることにより絶命させ、光虫に光を放たせるというものである。

その光により、殆どのモンスターは視力を奪われ、一時的にであるが行動を限定させることが可能なのだ。また、飛行中のモンスターや、滞空中のモンスターなどにこれを投げつけると、バランスを崩し、地上に落下してくる。

地面に倒れ伏し、もがき苦しむディアブロス亜種に向かって、ウチナラシを何度も振り下ろす。

体勢を立て直した後も、手を休めることなく振り回した。

そして、ついに――。

「グオオオオオ！」

片方の角がバキンと圧し折れ、さらに、ディアブロス亜種が再び体勢を崩した。

見ると、目が完全に白目を剥いている。

これは、めまい状態と呼ばれ、ハンマーと狩猟笛などの打撃系の武器でモンスターの頭部を叩くことで引き起こすことができる現象だ。

軽い脳震盪を起こし、相手を少しの間完全に無防備な状態に出来

る。

これは、ハンター側にとって非常に有利な状況だ。しかし、モンスターも徐々にめまい状態耐性ができてくるため、精々、一度の狩猟で3回めまいに出来たら良い方だろう。

俺はその間に、最も肉質が柔らかい部分——尻尾の付け根にウチナラシを連続で叩きつける。

今度は、その軟かい肉が避け、血が噴き出した。俺は、帰り血を全身に浴びたが、無視して攻撃を続行する。

1、20秒ほどすると、もう回復して起き上がって来た。

再び股下に潜り込み、ウチナラシを振るう。

「グロオウウウ!!」

一瞬、ディアブロス亜種が怯んだ様に巨軀を竦ませる。

それを見て、俺はほくそ笑んだ。

少しずつだが、衝撃が蓄積^{ダメージ}してきている。このままいけば、また倒れるだろう。

「グ……ラッ!!」

イラついたのか、何度か足踏みを繰り返す。

突然、ディアブロス亜種が、一拍、力を溜めた。

「ヤベえ!!」

俺は、全速力でその巨体の下から逃れた。

次の瞬間、ディアブロス亜種は勢いよく体当たりを繰り返す。

当然、股下まで効果は及び、砂が舞い上がった。あのまま、あそこにいれば、かなりのダメージを負ったに違いない。

俺は若干冷や汗をかきながら、次の攻撃の機会をうかがう。

と、急に体が重くなったように感じた。

「チッ……演奏効果が切れたか」

演奏効果には時間制限があり、その時間を超えるとまた演奏し直さなければならぬ。

通常のソロの狩猟笛使いなら、エリアをいったん離脱して、危険がない所で演奏をし直すか、もしくは演奏効果なしで狩りを続行す

る。

だが、飽くまでそれは通常のソコの狩猟笛使いの場合だ。
伝説とさえ呼ばれた俺は、そんなことはしない。

俺は、ディアブロス亜種が振り向くタイミングで、ウチナラシを
抜刀。

そのまま、ディアブロス亜種の顔面を撫でるように叩き、そのま
ま1の構えに移行する。

さらに音がまだ出ないうちに、股下へ入るようにして、ウチナラ
シを叩きつけ、2の構えへ移る。

再び間髪いれずに、ウチナラシを左に振り、1の構えに逆戻りする。
結果、その巨体の股下から出て、ディアブロス亜種の翼の下に
出た。

そのまま演奏を続け、『解放の旋律』を奏でる。

「グロオオオオオ……！！」

その時、ディアブロス亜種がいきなり威嚇行動を取った。

だが、通常の威嚇とは違い、全身から怒りのオーラが迸っている。
ベテランであるはずの俺が、圧倒されそうなほどだ。

やはり、何度経験してもディアブロス種の“キレた”状態には慣
れない。

「チツ。“キレた”か」

“キレた”というのは、モンスターの怒り状態のことを指す。

怒り状態とは、モンスターが生命の危険を感じた際、己を顧みず
に我武者羅に攻撃を繰り返すようになる現象のことだ。大抵のモン
スターは、この状態の場合、俊敏性や攻撃力が上昇し、とても危険
になる。それまでは狩猟が順調に行っていたのに、怒り状態になっ
たとたん、全滅の危機に晒されたというのはよくある話だ。

ディアブロス種は、モンスターの中で最もプライドが高いと言わ
れる。

そのため、自身より格下である“ニンゲン”の猛攻に晒されると、
非常に頻繁に怒り状態になるのだ。

さらに、その怒り状態時の能力の上昇が高いため、とても厄介になる。また、怒り状態のディアブロス種は音爆弾が効かなくなる為、攻撃のチャンスも減り、ハンターにとって2重に厄介な状態と化するのだ。

「破あつ！」

だが、俺はそれを無視して演奏を続ける。

今度は、大きく後ろにウチナラシを叩きつけ、3の構えに移った。再『猛攻の旋律』を演奏する。

「グララララアアアア！」

だが、演奏もそこまでだった。

急に、ディアブロス亜種が大きく咆哮したのだ。

「ぐうう……！」

それは単なる音ではなく、精神そのものを揺さぶる。

俺は、思わずウチナラシを取り落とし、耳を塞いで小さくなった。

“バインドボイス”と呼ばれるそれは、殆どのモンスターが行う“咆哮”に付随してついてくる効果だ。ハンターの本能にまで働きかけ、しばらくの間——10秒ほど——ハンター動きを完全に止めてしまう。

ハンターにとっては、この上なく危険な状態だ。硬直している隙に、モンスターの攻撃を受けてしまう可能性があるためである。

「くうっ……！」

漸く硬直が溶けた時には、ディアブロス亜種の顔が眼前に迫っていた。

ヤバイ！ 生存本能が警鐘を鳴らす。

俺は必要最小限の動作でウチナラシを拾い、前転を繰り返すことでその危険範囲から逃れた。

逃れた瞬間、ディアブロス亜種の巨体が俺の居た場所を通り過ぎていく。しかし、今度はスピードが出る前に足を止め、此方を向いてまたもや突進してきた。

俺は焦らずに左に走る。

キレて、かなり俊敏になっているものの、スピードが乗っていないため今回は余裕で回避できた。

そのままディアブロス亜種のもとに走り寄り、その後ろ脚にウチナラシを叩きつけ、抜刀から1の構えまでの移行を出来るだけ素早く行う。

ディアブロス亜種が振り返るまでに、『解放の旋律』の効果を発動させた。

振り返った時に頭に丁度重なるようにして、後ろに叩きつけ、演奏2に移行。深追いはせずに、左の何も無い地面にウチナラシを叩きつけ、身体を移動させ演奏1に戻る。

「グルルルル……！」

その時、いきなりディアブロス亜種が尻尾を時計回りに振り回し始めた。俺から見て、反対側を丸太の様な尻尾がブンッ！と音を立てて通過する。ディアブロス亜種は、その勢いに身を任せて身体を反転させた。

次は俺に居る所に尻尾が来る。俺は経験からそう予測した。

俺は焦らずに、速攻で右にウチナラシを叩きつけ、1の構えのまま股下に移動した。

俺が居た所を尻尾が通過し、ディアブロス亜種が元の体勢に戻った瞬間、ウチナラシを跳ね上げ、真後ろの肉質が柔らかい尻尾裏に叩きつけた。

「グロウウウ！？」

ダメージが蓄積されていたのか、怯むディアブロス亜種。

俺はその隙に『猛攻の旋律』を再び奏で、効果を発動させる。

「まあ、『堅守の旋律』は要らねえだろ……」

攻撃を食らわなければいいのだから。心の中で独り言にそう付け足すと、演奏の構えを解き、ガラ空きの足へ、連撃を加えた。

右、左、右。

今はキレて俊敏性が上がっている。深追いは禁物か……。

そう判断すると、俺は前転で股下を抜けだし、ディアブロス亜種

と距離をとった。

ディアブロス亜種のキレて血走った目が、此方に向けられる。一瞬、目が合った。凄まじい怒りに、呑み込まれそうになる。俺はそんな雑念を振り払うと、ディアブロス亜種の一挙手一動足に神経を傾ける。

雑念を振り払っておいで正解だった。

巨体に似合わない俊敏な動作で、突進に必要な予備動作を済ませると、ディアブロス亜種は、最初からかなりスピードで此方に迫って来た。

「ふっ！」

いち早く察知した俺は、そのままギリギリまで引き付けると、身を投げだす。が、キレたときの速さを読み間違えたらしく、防具の足の先に引っ掛かり、そのまま吹っ飛ばされた。

「うおっ！」

砂漠の大地を何度もバウンドしながら飛んでいく。視界がとんでもない速さで後ろに流れていった。

身体が防具の内部に当たり、なかなか痛い。

そして、ザザーと音を立てて漸く止まった。防具の中に砂が入りこむが、気持ち悪いなんて悠長なことは言ってられない。

ほんの少し引っ掛かっただけなのに、この威力。まともにぶつかったらと想像すると、肝が冷えた。

立とうとすると、若干ふらつく。

…………… 本当に、ぶつかっていたらどうなっていただろう。

俺は、取り敢えず、受けたダメージを回復する時間を作るため、さらに追撃を加えようとしているディアブロス亜種に向かって閃光玉を投げた。

辺りが真っ白になる。つぶっていた目を開けると、そこには突進の途中で目を回しているディアブロス亜種の姿が。

それを確認すると、俺はポーチから緑色の液体が詰まった瓶を取り出した。手際良くふたを開け、中身を一気に飲み干す。口いっぱ

いに青臭い、草の味が広がるが我慢した。

ふらついていたのが、瞬時に元通りになる。

俺が飲んだのは“回復薬”と呼ばれるアイテムだ。“回復薬グレート”と合わせてハンターの必需品と言っても過言ではない。これらのアイテムは、読んで字のごとく、ハンターの体力を回復してくれる。自然治癒力を高めてくれるらしいのだが、よく分からない。まあ、これを飲めば大抵の怪我が治るので、それさえ確りしていればそれでいい。

回復薬を飲んだ後に、身体の調子を確認すると、俺はまだ目を回しているディアブロス亜種に向かって駆け出した。

ギザミズメールの男が、瀕死のディアブロス亜種にとどめの一撃を叩きつけた。

「グロオオオオオオオオオオ..... オオ」

足の甲殻は、そのほとんどが剥けており、丸太の様な尻尾も半分ほど抉られて細くなっている。

「ふう……。討伐完了、だな」

俺は、よいしょと言いながら腰を上げ、ディアブロス亜種の解体に取り掛かった。

小さなバクテリアが高速で分解するためとか、モンスターの身体がそういうふうにできているのだ、とか言われているが、詳しい原因は分かっていない。

22

俺は手際よく解体を済ませ、部位ごとに切り分けていく。

瞬く間に甲殻やその他もろもろの素材の山が出来上がった。流石に翼や頭は無理なので置いておく。

さらにその中から、比較的損傷の少ない素材だけを選んでいく。そうして選別していくと、半分近くまで減った。しかし、重厚な甲殻がその大半を占めているため、かなりの重量になりそうだ。

俺は、いつそのこと全部捨ててやろうかな、などと悪態を吐きながら、それらを頑丈そうな布に包み、背負う。

予想した通り、かなりの重量だった。

「さて、帰りますか……」

ここからが問題である。この荷物を背負って、今回の狩りの拠点として使っていたベースキャンプまで帰らなければならないのだ。

そこには竜車と呼ばれる、草食竜に二台の様なものを引かせる移動手段が置いてあるので、帰りはそこに積んで帰ればいい。しかし、それまでの道のりは自分で背負って帰らなければいけないのだ。

あくまでここは狩り場。ディアブロス亜種の様な大型のモンスターはいなくても、小型のモンスターならうじゃうじゃいる。

そんな所を、大きな荷物を背負って帰るのだ。ある意味、ディアブロス亜種との戦闘よりも神経をすり減らす。

俺は、はあ、と1つ溜息を吐くと、ベースキャンプに向けて歩き始めた。

重い荷物を背負っているせいか、砂に足が沈みかなり歩き難い。

…………… 本気で捨ててやろうか。

そう思った俺は、悪くないはず。

そんなこんなで、漸くベースキャンプにたどりついた時には、討伐から1時間が経っていた。

へろへろになりながら、竜車の荷台に素材を積み込む。そして、

そのままふらふらと、仮設テントにあるベットへと倒れこんだ。

「っ、疲れた……。こんな重労働じゃ腰に負担が掛かってしょうがない……………」

もう年なのに……。というつぶやきは、やや白み始めた夜空に飲み込まれて消えていった。虚しい。

あれ？ 目から汗が……。

俺は、目から流れ出た一筋の汗を慌てて拭くと、ベットのスプリングを利用して、飛びあがった。仮設テントのはずだが、無駄に金がかかっているな……。

そんなことはさておき、テントを出て、竜車のもとへ行く。

ゴキゴキと首を鳴らすと、竜車の荷台に飛び乗った。

「ンモオオオ」

草食竜——アプトノスがどこかに声を上げる。

「よし、出発だ！」

竜車の鞭で、出発を告げる。

四本足の頼れる相棒は、俺の帰還を待つ村にその歩みを向けた。

竜車に揺られること半日。

漸く村が見えてきた。

俺の住む村は、さっきの狩り場とは正反対——丁度砂漠の最西端と最東端の位置関係にある。

そのため、相当な時間がかかった。

往復まる1日掛かった計算だ。

狩り場を出た時が夜明けの少し前で、今はもう夕方である。

心身共にへとへとだ。早く休みたい。この老体、というにはまだ早い、が、老いの影が忍び寄って来る年頃になると、なかなかきついものがある。

漸く村に到着した。

「あ、お帰りなさい。狩猟お疲れ様です。シドウさん」

村長の息子——カーグが俺に挨拶してきた。

カーグは年老いた村長に代わり、実質的に村を仕切っている。今年で三十路だったはず。堅実で実直なその性格から、村のみんなに好かれているのだ。

「ああ。ただいま」

笑顔であいさつしてきたが、短く挨拶するだけで通り過ぎた。向こうも疲れていると分かったのか、そのまま何も言わず通してくれる。

「お疲れ様でした」

「ありがとう！」

「狩猟お疲れ様！」

「いつもありがとう！ 頼りにしてるよ！」

村のギルドまでの道中で、擦れ違う人皆が、ねぎらいの言葉や感謝の言葉を告げてくれる。

俺の頬は自然と緩んだ。

こういうとき、ハンターの仕事を選んで正解だったと思う。皆を守れたという達成感と誇り。そして、感謝されること。これに勝るものは無い。

昔俺は、各地を転々としてハンター稼業を営んでいた。1つの所に根を下ろすということがあまり好かなかったのだ。

だが、歳を重ねるごとに、何処かに留まりたいという思いが強くなった。そうして俺はここにいます。

俺の息子——サザメも若いころの俺のように各地を転々としていた。そう。

いずれは、やはり何処かに腰を落ち着けるのだろうか。

それじゃあ、全く俺と同じじゃないか。防具だって武器だって似たり寄ったりなのに。

そんなサザメの姿を想像すると、おかしくて、思わず噴き出した。願わくば、俺の息子が幸せになりますように。

柄にもなく祈った所で、ギルドに着いた。

あとは、クエスト終了の届け出を出して家に帰るだけだ。ふと空を見上げると、宵の明星が早くも空に瞬いていた。

～ f i n ～

（後書き）

こんにちは／こんばんは。

初めましての方も、すでにご存じの方もいらっしゃると思いますが、
ここで一つ挨拶を。

初めまして、夕顔と申します。

今回、初めてモンハンの二次を書かせていただきました。

読んでいただき、ありがとうございます。

いかがだったでしょうか。

色々と稚拙な部分が多かったと思いますが、そこはご容赦ください。
皆さまを、少しでも楽しませることができたなら幸いです。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3004o/>

MONSTER HUNTER PORTABLE 2nd G 狩獵笛の音色

2010年10月16日18時10分発行